

ヘルマン・ヘッセにおける東洋受容と ヨーロッパ人としてのアイデンティティー

鍵谷 優介*

ヘルマン・ヘッセが自身の西洋的自我の問題、そして第一次大戦後のヨーロッパの精神的荒廃を、東洋の叡智を駆使することによって克服していった過程を、『シッダールタ』や当時のエッセー、書簡などを手がかりに探っている。まず、『シッダールタ』の中で度々語られる「転生」体験について、キリスト教、インド思想及び仏教、そして中国思想における概念を比較しながら、ヘッセがどのように影響を受けたかを考察している。また、作品の中心思想といえる「統一の思想」への道のりを、主人公シッダールタの内面的成長と、作者ヘッセの当時抱えていた「ヨーロッパの没落」を精神的に救済しようという試みとも絡ませながら論じている。ヘッセにおける思想的変遷、特に東洋思想の受容は、ヨーロッパ精神の均衡を回復しようという悲願の達成のみならず、自らのヨーロッパ人としてのアイデンティティーの確立をも促す役割を果たしたのである。

キーワード：ヘッセ、シッダールタ、ヨーロッパ精神、自我、転生

序章

ヘルマン・ヘッセにおける東洋受容という問題は、この作家のヨーロッパ人としてのアイデンティティー形成という側面を抜きにして語ることはできない。本論ではこのことを踏まえながら、特に『シッダールタ』執筆当時の1919年から1922年頃の、第一次大戦後のヨーロッパ精神の退廃、即ちヘッセが自身の小論で述べた「ヨーロッパの没落」に対する作家としての精神的救済、及び「母なるアジアへの回帰」の試みをも考察していきたい。『シッダールタ』を中心に、またこの周辺のエッセーや書簡などを手がかりにしながら、この作家の内面的道のりを辿っていくことにする。

* 人間科学総合研究所客員研究員・東洋大学文学部非常勤

1. 「転生」という概念について

まず、『シッダールタ』を読み進めていくうちに浮かび上がるのは、主人公が内面的成長を遂げる際に所々で大きな役割を果たす「転生」体験であり、これをどう捉えるか、という点が問題となってくる。登場人物の言葉を通して窺える「転生」観は、執筆当時のヘッセが、この「転生」(Wiedergeburt)をどう捉えていたかが浮き彫りにされている。そこで、ヘッセが影響を受けたキリスト教、インド思想及び仏教、そして中国思想における「転生」の概念を、以下にまとめてみることにする。

ヨーロッパの初期神学では、転生思想は積極的に取り入れられていた。しかし、543年にユスチニアヌス帝がコンスタンティノープルで宗教会議を招集した際、オリゲネスの神学を糾弾し、転生学派を破門させた。教会と国家が、転生思想における自力本願の教えに自分たちの権威が低下させられるのを恐れたからだ、と言われている。そのため、転生を否定するカトリックがヨーロッパで支配的になったのである¹。ただし見方を変えると、いわゆるオカルティズムとしての転生思想は、カトリック二千年の歴史の中で地下水脈となって一度も途絶えることはなかった、ともいえる。最後の審判と肉体の復活というドグマと、根強い転生説とのせめぎあいとがヨーロッパのオカルティズムを形成したといえるし、カタリ派のようなあらゆる異端キリスト教の歴史ともなってきた。また、プロテスタントが長い宗教戦争のあとで結局カトリックと共存するにいたったのは、「転生説」のようなドグマを根本的におびやかすような異説を持たなかったからである²。

次に、インド思想及び仏教における輪廻転生の思想に目を向けてみる。バラモン教では、各個人の本体である「アートマン」(我、または靈魂)が宇宙の根本真理であるブラフマン(梵天=絶対者)と同一であるという「梵我一如」の思想に支えられており、この心理に対する無知のために、人間は各自の「業」によって種々の形をとりながら、無限に輪廻を繰り返すとされた。したがって輪廻を免れるためには、この「梵我一如」の真理を悟って、業の力を消滅させ、再生を免れるようにしなければならず、これこそが人生における最高目的であり「解脱」なのであった³。一方、仏教においては、この業・輪廻・解脱といった思想を受け継ぎながらも、「アートマン」の存在を否定し、「アナートマン」(無我)という新しい立場をとり、また人生そのものを苦として受けとめたため、ヒンズー教とはいささか違った教えを展開した。つまり、人間存在そのものを嫌悪し、再び輪廻しないようにすることが最高目標であると説いた⁴。

そして最後に、中国における輪廻転生観を見てみる。六朝とよばれる時代の知識人が仏教の思想に惹かれるようになったのは、老荘思想における根本思想の「無」と、仏教の「空」が根本において共通する点があるからだとされている⁵。しかし、このような理解は専門家である僧侶や、水準の高い知識人に限られていた。一般の知識人や民衆に受けたのは、他ならぬ仏教の「輪廻」の説であった。輪廻説によれば、人生はこの現在の一世だけでなく、生前の過去にあった無限の前世と、死後の未来にも続く無限の来世という三世がある。しかもこれらは互いに無関係ではなく、前世の行為の善悪は

現在の禍福をもたらし、現世の行為の善悪は来世の禍福を招くという因果応報の理が働く、というので、中国人は「輪廻説」を「三世報応」の説とよんだ⁶。このような仏教の理解は正しいものではないが、「輪廻」からの「解脱」に救いを求めたインドの思想に対し、中国では輪廻そのものに救いを求めたという点で、注目に値する。

ここまで、ヘッセが影響を受けた思想における「転生」概念の捉え方を見てきたが、ヘッセ自身はインド及び中国思想との関係について、「私と精神的インド及び中国との関係について」(Über mein Verhältnis zum geistigen Indien und China) というエッセーでまとめている。これによると、彼の両親、そして母方の祖父ヘルマン・グンデルトはインドで新教の宣教師として過ごしていた時期があった。インドの言語を話すことができる家族と、たくさんの絵や書物、民族衣装などに取り囲まれ、ヘッセは幼いときから無意識にインド的なものを呼吸していた。しかし、キリスト教、そしてイエスの教えが結局は最後に帰依するものであり、また同様にゲーテやその他の西洋の知恵を賞賛していた。ヘッセはこのことが常に自分にとって、宿命的で越えることのできない壁であったと述べている⁷。ヘッセのインドとの接点はしばらく途絶え、27歳でショーペンハウアーに取り組みようになって、再びインド思想との関わりをもつようになった。また1907年から1919年頃まで「モンテ・ヴェリタ」(真理の山) というコロニーで、神智学や異教的なもの、東洋的なものに関心を示す人々の集まりに関わり、思想的影響を受けたものと思われ、そこでバガヴァッド・ギータの翻訳やオルデンベルクのブツダについての本を知ったという。この時点では、ヘッセは仏教全体を「諦念・禁欲」と捉えていた。こういった考え方を修正させることになったのは、リヒャルト・ヴィルヘルムの翻訳によって出会った中国思想であった。実は、ヘッセの父親は敬虔なキリスト信者でありながら、同時に老子の思想にも傾倒し、イエスとの比較研究なども行っていたため、ヘッセも老子については既に大分前から知っていたようである。その後、ヘッセ自身も老子の思想と取り組むことになり、このことは自分にとって大変重要な啓示になったと述べている⁸。その後、精神分析の治療を受け、そこから得た両極的・総合的な思考、という知恵が、ヘッセの思考から「諦念」を軽減していく助けとなった。この転換をヘッセ自身、インドから中国への、即ちインドの禁欲主義的思考から、中国の市民的・肯定的な思考への転換と述べている。このことは『シッダールタ』における転生観を解説していく上で、大きな手がかりとなるであろう。

1921年2月の書簡でヘッセは、「シッダールタが死ぬときは涅槃を望まず、再生に同意し、そして新たに人生への一步を踏み出すであろう⁹。」(拙訳)と述べている。この考えは、転生を苦と見なすインドの思想とは明らかに異なった、再生、即ち輪廻に救いを見出す中国の思想の影響が見て取れる。

2. 螺旋を描く生

今度は、この「転生」を、『シッダールタ』の構成に当てはめた解釈を紹介しながら、より作品に密着して考察していくことにする。グルジアの研究者 Reso Karalashvili は、『シッダールタ』を図

形的に眺めてみると、円環（Kreis）状になっていることに注目している。例えば、主人公が川のほとりに生まれ育ち、最後にまた同じ川のほとりに戻るといった発展の構図そのものが円環を成している点を挙げている¹⁰。そしてこの作品を個々の成長段階の連続する複合体として、上からではなく側面から考察してみると、螺旋形（Spiral）を描くとしている¹¹。

この螺旋形的な筋の展開という解釈については、シッダールタの成長・発展に当てはめられるだけでなく、第一部第2章「沙門たちのもとで」において、友人ゴウヴィンダとともに森の沙門の許で修行をしていたシッダールタが発した「われわれはいったい正しい道を歩いているのだろうか。」という問いに対する、「輪を描いてまわっているのではない。われわれは上に向かって進んでいる。輪はらせん形をなしている。われわれはもう幾段が登った¹²。」というゴウヴィンダの答えにも象徴的に表されている。つまり、輪を描いてぐるぐる回っているだけでは永遠にそこから離脱することはできないが、上へ向かっていく方向性を与えることによって螺旋形を成す。このように輪廻からの離脱、つまり解脱をするということは、この作品においては螺旋状の運動性によって象徴されるものである。これは特に第二部以降、シッダールタが世俗の世界に翻弄されたり、カマーラとの愛欲の生活に耽ったり、また彼女との間にできた息子への愛着のために心を乱されたりといった、平坦とはいえない道を歩みながらも、幾度か転機を経て結果的には上昇し続けるその足跡を象徴しており、作品を読み解く上で見逃せない点である。

また、この螺旋形を成すシッダールタの成長は、ヘビの形象によっても強調されている。ヘビはヒンズー教の神話においては螺旋系の類似物であり、また生の開放性及び永続性の象徴とされている¹³。主人公の発展を示す曲線が起点へと向かい、円環を形成しようとするその最後の瞬間、つまり新しい段階へと移り変わるとき、ヘビが象徴的に登場してくる。前半のクライマックスといえる第一部第4章「めざめ」において、仏陀の教えにも学ぶべきものを見出せなかったシッダールタが林園を去って自らの内に潜むものに思いをめぐらせていた際、「古い皮がヘビから脱落するように」自分の若い時代のように師を持ち、教えを聴こうという願いがもはや存在しないのを確認する。そして同じ章のさらに進んだ箇所、まさにタイトルどおり「めざめ」を体験し、自らの感覚を頼りに、「ほんとうに目ざめたもの、あるいは新しく生まれたものとして、生活を新しく完全に初めから始めなければ」と悟った際、「まるでヘビが目の前に路上に横たわってでもいたかのように」立ち止まる。誰にも頼らず、自分の内面に迫り「シッダールタ自身」を探っていこう、と悟ったこの瞬間、ヘビを用いた比喻が使われているのは象徴的である。また、作品中においてヘビが現れるのはもう一箇所、第二部第5章「渡し守」において、かつてのシッダールタの愛人だった遊女カマーラが、入滅寸前の仏陀の許へ向かってわが子と旅をしていた際、ほんの少しの休息の間に小さな黒いヘビにかまれる場面である。たまたまシッダールタと渡し守ヴァズデーヴァのいる渡し場の近くに助けを求めてやってきたカマーラと息子は、ここで思いがけずシッダールタと再会することになる。カマーラの傷は洗われたにもかかわらず既に体中を苛み、カマーラはかつての愛人シッダールタに看取られながら、二人の間に授かった息子を残して逝ってしまう。ここに現れたヘビは、「めざめ」の章におけるように比喻としての形

象で登場してきているわけではなく、実際に眼前に現れて、しかも登場人物に傷を負わせている。しかし、このヘビが話の筋に及ぼす影響力という点に目を向けてみると、螺旋形に象徴される主人公の発展性へ貢献をしており、再生と変化のシンボルとして作品中に参与している、とも考えられる。カマラーの生命の環は確かにここで閉じられる。しかし、かつて愛の術を学んだ彼女との間に授かっていた息子と出合わせ、そしてカマラーの最期を見届けさせた上で、新たな生命力を受容させ、その後のシッダールタのさらなる発展の契機となったとも考えられるヘビの存在性には注目すべきである。

また『シッダールタ』全体の構成を鳥瞰的に見ると、作品全体がきれいに4章ずつ3つの段階に分けられ、第一部第4章、及び第二部第4章において主人公の人生に大きな転機が訪れている。前者については既に述べたが、後者における転機の場面は、以下の箇所である。シッダールタはカマラーから愛の術の手ほどきを受け、豪商カーマスワームの許で商売を習い、世俗的な享楽に耽りながらも、彼らのような小児人（Kindermensch）の日々の営みが輪廻（ここではSamsaraという語を用いている）という遊戯であるとし、自分の中で何かが死んだのを感じる。町を離れ森の中を彷徨い、川岸に佇みながら水中に身を投げ出したいと願っていたとき、シッダールタは突然神聖な文句オームを思い出し、つぶやき始める。そしてこの瞬間、梵（ブラフマン・最高原理）を知り、ヤシの木の根元に倒れ、深い眠りに落ちるのである。この転生を体験する直前の深い眠り、そして目覚めた後の「今新しい人間としてめざめて世界を見ている」体験は、まさにシッダールタが自分の生の根源に立ち返った瞬間であり、第一部第4章「めざめ」における悟りの体験とともに、作品中のクライマックス（Höhepunkt）を成している。このように、全12章（第一部4章、第二部8章）のうち、2箇所のHöhepunktが全体をちょうど三分割するように配置されており、美しい均衡を成している。

3. 「統一の思想」への道

この章では、ヘッセが『シッダールタ』の中で主人公の口を通して語らせ、作品中の中心思想を成しているともいえる「統一の思想」（der Gedanke der Einheit）と、そこに至る道のりについて考察してみたい。

まず、1919年に発表され、翌1920年に『混沌を見る』（Blick ins Chaos）という小冊子となって他2編とともに刊行された「カラマゾフ兄弟 - ヨーロッパの没落」という小論の中でドストエフスキーの思想にヘッセが読み取った「アジア的理想」というものについて見てみることにする。

カラマゾフの理想が、非常に古いアジア的・神秘的理想が、ヨーロッパ的となりはじめ、ヨーロッパの精神を食いつくし始めている。それが、わたしがヨーロッパの没落と呼ぶところのものだ。

この没落は、母へ帰ることを意味する。それはアジアへ、源泉へ、ファウストの母たちへ帰ることであり、もちろん地上のすべての死がそうであるように、新しい誕生に通じるであろう¹⁴。

ヘッセの「カラマゾフ兄弟 - ヨーロッパの没落」は、当時の他の作家たちが同じテーマに取り組みながらも、単に警告、あるいは嘆息をまじえて捉えているのに比べると、「没落」から新しい生

命の誕生、即ち「新生」を予見している。ヘッセがこの小論を発表し、そして『シッダールタ』に取り組み始めた1919年は、ちょうど第一次大戦後の物質的及び精神的荒廃に全ヨーロッパがひどく喘いでいた頃である。キリスト教文化、ひいては父性原理・合理性のもとに統合されていたはずのヨーロッパが、それまで抑圧していた母性原理的なもの・非合理的なもの、異教的なものに目を向けるようになっていた時代でもあった。

なお、「ヨーロッパの没落」という表現は、シュペングラーの『西洋の没落』を思い起こさせるが、1920年9月の手紙で、ヘッセは「ヨーロッパの没落」という表現をシュペングラーの書物の出版より一年半も前に『クリングゾルの最後の夏』の中で用いたことを述べており、シュペングラーの影響を否定している¹⁵。既に1919年執筆の『クリングゾル』の中で「没落の音楽」という章を設け、その中で主人公の画家クリングゾルが自らの内部における、そして古いヨーロッパの没落を予見し、語っている。また、さらにそれより以前に書かれた『デーミアン』でも、ヨーロッパ世界の没落と新生を、個人の内面において受け止めている。

ちなみに1922年3月、T・S・エリオットがヘッセに自ら手紙を送り、自分が編集している雑誌にヘッセの評論を掲載したいと言ってきたのに対して、ヘッセは「カラマゾフ兄弟 - ヨーロッパの没落」と、「ドストエフスキーの『白痴』に関する考察」を送っている。エリオットはこれを友人に英文翻訳してもらった後、文芸誌The Dial第52号（1922年6月）に掲載した¹⁶。また、エリオット自身、自分の詩『荒地』(The Waste Land)の注に、ヘッセの「ヨーロッパの没落」の最終部分を引用している。

では、少年の頃から自己の本性の内部に破壊し難い、宇宙と一体となるアートマン(真我)を知り、自我の中の源泉を探ることに光明を見出したシッダールタを、なぜヘッセはあえて、さらに求める者として描いたのだろうか。それは、シッダールタの模索を通じて、ヘッセが自分自身の文学的使命に立ち返ろうという試みを持ったとともに、当時のヨーロッパが歩んでゆくべき道を見出そうとする自分自身の姿をもそこに反映させようとしたのではないだろうか、と考えられるのである。今泉文子氏は「文学的なものとユング心理学」の中でヘッセの『デーミアン』を、霊と肉、精神と自然、善と悪、意識と無意識といった「西欧近代の宿命たる二極分裂を、今こそわが運命として受け入れようという決断の書」という定義と同時に「没落に喘ぐ文明社会の病理を一身に引き受けて生きようという決断の書」と定義している¹⁷。その延長線上で『シッダールタ』を定義すれば、そのようなヨーロッパの時代の病理を一身に引き受けたヘッセが、東洋思想をはじめとする過去の偉大な知恵と取り組むことによって得た、精神的救済のための指南の書であり、しかもそれは自身の内面の救済と、ヨーロッパ精神の救済をも意味しているのである。そして、『デーミアン』における「個性化の過程」・「人格の生成」の強調が、いかにもヨーロッパ人的な自我との対峙を象徴しているとすれば、『シッダールタ』における神的な追究、即ち「人格を乗り越え、神に満たされる」試みは、東洋思想を受容した一ヨーロッパ人としてのヘッセが表現しうる形での新しい「自我の完成」への道のりといえる。

ヘッセは『シッダールタ』執筆以前の1911年、実際にスマトラ、スリランカ、シンガポールとい

ったアジアの地を訪れている。後に「欧州からの逃避」だったと述べるその旅行において、ヘッセは観念として抱いていた東洋と現実とのギャップ、特に植民地化によるアジアの伝統文化の衰退に失望を感じながらも、彼らが日常的に宗教に勤める姿に感銘を受け、「誰もが宗教を持っている」ことに羨望のまなざしを向けている。さらに「私たちがそれをより高次の形態で再び獲得することがなければ、私たちヨーロッパ人はもはや東洋に対していかなる権利も持ち合わせないことになるだろう¹⁸。」と、このアジア旅行を基にまとめられた23編の紀行文からなるエッセー集『インドから』のうち、最後に置かれた「帰還」の中で述べている。ここでの、「より高次の形態で」その日常に息づく宗教を獲得しようという部分に注目したい。また、1914年に書かれたエッセー『アジアの思い出』(Erinnerung an Asien)においても、「ヨーロッパ文化の救済と存続¹⁹」に目を向けていることからわかるように、単に東洋に対する無垢な憧憬や関心からヘッセはその思想に従事したのではなく、そこにはヨーロッパ精神の救済と更なる発展をかけての、一ヨーロッパ人としての悲願と矜持が込められているのである。そしてそれが『シッダールタ』においては「自我の中の源泉」を見出すこと、そして「統一の思想」に満たされることとして、主人公に探らせているのである。

しかし「統一の思想」を探る内面の旅は、作者であるヘッセ本人にとっても容易ならざるものであった。全体のおよそ前半三分の一を成す『シッダールタ』第一部が1919年の冬から一気に書き上げられた後、第二部に入ってから一年半も停滞し、1922年ようやく完成されたという執筆事情を鑑みて、内面の成熟・熟成が必要とされた期間であったのであろうと思われる。1921年4月の手紙のなかでは、

輪廻から脱する道というのはもちろん古いインドのものであり、輪廻はNichtwissen(無為)をもって終わります。そしてその目標は涅槃であります。単なる知的認識としてはそれはもちろん無邪気なものであり、絶えざる修行と瞑想によってこの認識が全生活の基礎となる時のみ、宗教的であり実践的な価値を持ちます。このことがヨーロッパ人には困難なのです²⁰。(拙訳)

と告白している。また、後1931年になって、『クリングゾルの最後の夏』とともに『内面への道』(Weg nach Innen)としてこの『シッダールタ』がまとめられて出版された際、そのあとがきに「私はその時、自分の生きなかつた体験を書くのは無意味だという経験をした²¹。」と述べている。つまり、主人公シッダールタを最終的に解脱へと導くことが、知識としての方法論はわかっている、それを(創作物として)実践させること、そしてしかもそれが「ヨーロッパ人にとって」困難であることを強調している。この書簡の中で使われているNichtwissen(無為)と、シッダールタの目指す「自我の中の源泉」を探り当てることは、一見正反対のようであるが、実は最終章「ゴーヴィンダ」において、その問いに対する答えがシッダールタ自身によって語られている。渡し守となったシッダールタの許へ、そうとは知らずに一人の賢者として彼のところに教えを乞おうと訪ねてきたかつての盟友ゴーヴィンダが、自分は年老いているが、さぐり求めることをやめていない、と述べたのに対し、「さぐり求めるとは、目標を持つことである。これに反し、見いだすとは、自由であること、心を開いていること、目標を持たぬことである²²。」とし、ゴーヴィンダをさぐり求める(suchen)人、自

らを見出す (finden) 人として対置させている。そして作者であるヘッセ自身にも、まさにゴーヴィンダの如く「探り求める」行為から、自己の内面において最終的に表現しようとするものを「見出す」という姿勢に転ずる覚悟が必要であった痕跡が見て取れる。

「統一の思想」への到達、そしてそれを「探り求める」のではなく「見出す」という境地に至るまでに、シッダールタは自我の中に在する抑えきれない不足感を拭い去ることができない。かつて若き日に覚者仏陀に問いただした疑問がまずその一つであった。

あなたのその教えによると、万物の統一と首尾一貫が一か所で中断されております。(中略) それは世界の克服の教え、解脱の教えです²³。

解脱はごく限られた人間にとってのみ体験されうるものであり、教えによって得られるものではない。その解脱を体験した仏陀にさえ欠けていたのは、まさにその解脱の秘術を他人には伝授できない、ということであった。この周辺の事情について、『シッダールタ』執筆中のヘッセが手紙の中で告白している。

知恵というものが教えられるものではないということは、私が一度人生の内でも文学的に表現しようとして試みなければならなかった経験であり、その実験が『シッダールタ』なのです(1922年1月)²⁴。(拙訳)

そして、この「知恵というものの教え難さ」に通じるものとして、作中で繰り返し述べられているのが、「言葉への懐疑」である。

知識 (Wissen) は伝えることができるが、知恵 (Weisheit) は伝えることができない。(中略) 思想でもって考えられ、ことばでもって言われることは、すべて一面的で半分だ²⁵。

最終章「ゴーヴィンダ」でのシッダールタの台詞だが、これはヨーロッパ的なロゴスへの過信や認識・知性に対する盲信に対する不信感と、東洋的・静的な感受法や魂の機能への限りない憧憬の対比ともいえる。また、知性万能主義の対極にある霊的文化による、ヨーロッパ精神の均衡の回復・復権を願ってやまないヨーロッパ人としてのヘッセの姿勢も感じ取られる。

また、「言葉への懐疑」とともに、「時間が実在するものだという迷い」についても述べられている。「時間への懐疑」はそもそも「存在への問い」に連なるものであり、これは西洋哲学における根本的な問いでもあったが、この問いに疑問を發することは、現存在を超越し、より広大な精神の地平を獲得する契機ともいえる。

そして、この認識がさらに、「世界が不完全なのでもなければ、完全さへの道を辿っているのでもなく、瞬間瞬間に完全なのだ」という認識に達する。この認識は、仏陀のような人から学び得たものではなく、実は渡し守としての日々を送りながら、「川の声」に耳を傾けること、即ち「傾聴する」という術によって学んだのであった。

1921年11月にヘッセがロマン・ロランに宛てた手紙によると、この何年かは老子に私淑しており、Tao (道) という概念をあらゆる知恵の中でもっとも普遍的な概念であると述べている²⁶。当時ドイツでも9種類ほどの老子の翻訳が出ていたようだが、ヘッセは中でもRichard Wilhelmのものを好ん

で読んでいた。このヘッセのインド思想から中国思想への傾倒は、1922年7月の手紙において、自分は仏陀の教えとは対極のところの位置し、老子の教えに非常に近く位置していることを既に述べている上²⁷、同年11月のS. Zweig宛の手紙では次のように語っている。

私の聖者（シッダールタ）はインド的な装いをしておりますが、その知恵はゴータマよりむしろ老子に近く位置しているのです²⁸。（拙訳）

老子の思想を、特にNichttun（無為）の思想・概念を継承しているのが、『シッダールタ』では専らヴァズデーヴァであることは明らかである。そもそも、時間が存在するものだというまやかしを解いたのは、シッダールタが身を寄せ、ともに渡し守としての生活を送ったヴァズデーヴァとの生活であった。ヴァズデーヴァは「川にとっては現在だけが存在する」と語り、シッダールタを「すべての苦しみは時間ではなかったか」という悟りに導いている。このいつも静かな笑みを浮かべ、ただ川の声に、人の話に聴き入るだけの、しかしながら既に悟りに達しているかのような不思議で完成された風格を漂わせる老人ヴァズデーヴァは、老子そのものを詩的に結実させたものであると、Adrian Hsiaも指摘している²⁹。

「言葉による伝達の困難さ」、「時間という概念に対する懐疑」の克服、そしてあらゆるしがらみからの解放が、「自我の中の源泉」に触れ、「統一の思想」へと到達することになったのは明らかである。最後に、ある『シッダールタ』の若い読者へ向けたヘッセの手紙を引用し、この章のまとめとする。

真理を予感し始めた人（中略）、生の本質的なものを予感し、それに近づこうとする人、そういう人は、キリスト教の衣をまといようと他の衣をまといようと、間違いなく神の存在を体験するのです³⁰。

「真理」を予感し、「生の本質的なもの」を予感し（「自我の中の源泉」の気づき、といえよう）、それに近づこうとする一人の人間の魂を、ヘッセはこの『シッダールタ』において、インドの聖人の衣をまとわせて描いた。それはヘッセの生い立ちや思想的変遷から「必然」といえることであったが、決して固定化された一つの宗教の枠内にとらわれたものではない。むしろそういったものから自らを解き放って自由になることによって得られた、永遠なるものへ飛び立つための「思想の翼」を、『シッダールタ』の執筆を通じて獲得したのである。

4．終章 - 自我、そしてヨーロッパ精神の救済へ

『シッダールタ』がインドの聖人の衣を借りて「自我の中の源泉」、そして「統一の思想」を希求し続ける魂の漂泊を描いたものであるなら、その『シッダールタ』刊行の3年前の1919年に匿名で出版され、たちまちセンセーションを惹き起こした『デーミアン』は、よりヨーロッパ的な形で「自我の探求」をテーマとした作品である。この2作品に（ひいてはヘッセのほぼ全作品を通して）共通するのは、「他の誰でもない」自身の自我を発見する道程を描いている、ということである。

1923年1月の書簡から、この2作品を比較検討した箇所を引用してみる。

それ(『デーミアン』)は『シッダールタ』を補うもの、つまり同じ仲間の一つなのであり、そこで扱われているのはまったくもって人間の生成(Werden)であり、自分自身になろうとする個人の葛藤なのです。そして一方『シッダールタ』では、すべて「生成からの離脱」(Entwerden)、即ち個人というものを超えること(das Überpersönliche)に関わっているのです(1923年1月)³¹。
(拙訳)

ここには、第一次大戦という未曾有の人類・精神的危機を経験していく中で、そしてヘッセが創作を続けていく中で、作中で問い続けた「自我」の発見・完成というテーマが浮かび上がってくる。このように表現すると、「自我」というものがいかにも肥大化し、手に負えない扱い難いもののように感じられるが、そここのところの誤解を解くべく、ヘッセは書簡の中で記している。

求道者のいう自我、ヨーロッパの科学を除いて、ヨーロッパ以外の思想世界全体がこの三千年来取り組んできた自我、この「自我」は感覚的に感じてここにいると思う意味での個々の人間ではなく、すべての魂のもっとも内奥の、本質的な核心であり、インド人が「アートマン」と呼ぶ、神聖で永遠なものなのです。この自我を見出す者は、仏陀の道であれ、ヴェーダの道であれ、老子やキリストの道であれ、自分のもっとも深いところで万有と、神と結びついており、それとの合意に基づいて行動するのです³²。

そしてさらに、後1931年の小論「わたしの信仰」(Mein Glaube)における「わたしの『シッダールタ』が、認識ではなく、愛を上位に置いたこと、教義を拒否し、統一の体験を中心に置いたこと³³」という部分に、より明確にその答えが述べられている。

また、先に述べたEntwerdenとdas Überpersönlicheは、インド思想的な意味での「個人の破棄」ではない。老子の思想における「無為」(Nichttun)によって生命の根源に至る洞察を得ることによって、自我の、そしてひいてはこの宇宙の統一と生成のプロセスに思いを馳せ、あらゆるものの胎動を自らのうち感じ取り、「愛」を中心に据えながら「生」を肯定的に、その原初から見直そうという、作家としての決意表明に深く関わっているのである。

ヘッセはシッダールタの生涯を、生を常に生成・流転し、より高い境地へと至るプロセスとして捉え、人生を螺旋形の如くゆるやかに上昇してゆくものとして描いた。また、自身の内面の移り変わり、特に生まれたときから傍にあったキリスト教(プロテスタント)、そしてインド思想、中国思想との出会いを糧に、最終的にはヨーロッパ人としての自我との対決、そして和解を、シッダールタの生涯を通じて描いた。「自我」との対峙というテーマを据えながら、東洋の叡智を駆使することによってヨーロッパの精神文化を救済しようとした、「自我の中の源泉」を探る魂の巡礼の物語として、この作品は世に送り出された。即ちヘッセの東洋受容は、ヨーロッパ精神の復権という願いと、自らのアイデンティティーの再構築への架け橋となっていたのである。

註

『シッダールタ』本文の日本語訳は、『ヘッセ全集7』（新潮社）の高橋健二氏のものを使用させていただいている。

- 1) 竹下節子 『ヨーロッパの死者の書』ちくま新書 1995 S.31f
- 2) ebd.S.28
- 3) 花山勝友 『輪廻と解脱』講談社現代新書 1989 S.15
- 4) ebd.S.35
- 5) 森三樹三郎 『中国思想史（下）』第三文明社 1993 S.281
- 6) ebd.S.282f
- 7) Volker Michels (Hrsg) : Materialien zu Hermann Heeses Siddhartha, Erster Band, suhrkamp taschenbuch S.339 (以下M1とする)
- 8) ebd.S.340
- 9) ebd.S.125 (1920.2.10 an Lisa Wenger)
- 10) Volker Michels (Hrsg) : Materialien zu Hermann Heeses Siddhartha, Zweiter Band, suhrkamp taschenbuch S.267 (以下M2とする)
- 11) ebd.S.267
- 12) Hermann Hesse Gesammelte Werke 5, suhrkamp taschenbuch S.367 (以下GWとする)
- 13) M2 S.268
- 14) GW6 S.321 (日本語訳は『ヘッセ全集6』S.273)
- 15) Hermann Hesse Gesammelte Briefe 1, Suhrkamp S.460 (1920.9 an Hermann Missenharter)
- 16) 佐野仁志 「ヘルマン・ヘッセの「カラマーゾフの兄弟またはヨーロッパの没落」における内面への道」S.77
『KG ゲルマニスティック』（関西学院大学文学部ドイツ文学科研究室）第5号 2001 所収
- 17) 今泉文子 『鏡の中のロマン主義』勁草書房 1989 S.158f
- 18) Hermann Hesse Sämtliche Werke Band 13 Suhrkamp S.283 (日本語訳は、日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会 『ヘルマン・ヘッセ全集』第7巻 臨川書店 2006 S.257)
- 19) Hermann Hesse Sämtliche Werke Band 13 Suhrkamp S.354
- 20) M1 S.128 (1922.4.30 an Georg Reinhard)
- 21) ebd.S.369 (日本語訳は高橋健二 『ヘルマン・ヘッセ - 危機の詩人』新潮選書 1974 S.155)
- 22) GW5 S.461
- 23) GW5 S.380
- 24) M1 S.156 (1922.1.14 an Werner Schindler)
- 25) GW5 S.462f
- 26) M1 S.149 (1921.11.8 an Romain Rolland)
- 27) M1 S.165 (1922.7.22 an Theo Wenger)
- 28) ebd.S.180 (1922.11.27 an Stefan Zweig)
- 29) M2 S.203
- 30) Hermann Hesse Gesammelte Briefe 2, Suhrkamp S.51 (1923.2.5 an Berthli Kappeler) (日本語訳は日本ヘル

マン・ヘッセ友の会・研究会『ヘッセからの手紙』毎日新聞社 1995 S.147)

31) M1 S.184f (1923.1 an Leonhard Ragaz)

32) M1 S.105 (1920.2.28 an Helene Welti)(日本語訳は日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会『ヘッセからの手紙』S.116f)

33) M1 S.372 (日本語訳は『ヘッセ全集7』S.285)

Die Asien-Rezeption von Hermann Hesse und seine Identität als Europäer

KAGIYA Yusuke *

Hermann Hesses "Siddhartha" steht unter dem Einfluss von Christentum, Buddhismus und Lao-Tse. Die Kerngedanken dieses Werks sind die Wiedergeburt sowie der Gedanke der Einheit und der Urquelle im eigenen Ich.

Diese Abhandlung handelt davon, wie Hesse die geistige Krise im damaligen Europa und im eigenen Ich überwunden hat. Hesse hat seine kleine Schrift "Die Brüder Karamasoff oder Der Untergang Europas" und andere Werke (wie "Siddhartha") für die Veränderung in den Seelen der Menschen und die Erlösung des europäischen Geistes geschrieben. Sein Interesse richtet sich nicht nur auf den Ost-Gedanken, sondern auch auf die Überschreitung seiner Identität als Europäer.

Key words : Hesse, Siddhartha, der europäische Geist, das Ich, die Wiedergeburt

* A part-time lecturer in the Faculty of Literature, and visiting member of the Institute of Human Sciences at Toyo University